

一歩

社会福祉法人 アルカディア

令和3年5月発行 第32号

法人の2020年度決算を読む

～法人経営状況の厳しい局面は打開しうるのか？～

これまで当法人の決算を明らかにし、かつ読み取り、共有化することをしてこなかった。職員に余計な不安を抱かせたり、収益をあげるために尻を引っぱたくようなことを避けたいと思ってきたからなのか？

ただ、そう言っていられない状況がきている。群馬県下の福祉法人においても財政状況は厳しいと思われる。当法人でも同様な事態に直面している。

職員の給与は上げたい。ただ、原資がないところで給与や労働条件の改善を図っても「真綿で首を絞める」ことになりかねない。

そうした状況下で、まず、法人内外に決算を読み込み、共有化することが大切と思った。これは決して職員に「経営責任」を分担することを意図するものではない。職員に今まで明らかにしてこなかったことを公表し、ほんの少しだけ考えてほしいという意図が含まれている。また、外に向けて当法人の現状をさらけ出したうえで法人間の議論の参考にしてもらいたい。

ともあれ、＜先が見えない＞状況はしばらく続くだろう。＜出口の光が見えない＞トンネルの中で、それでも私たちは利用者とともに楽しく明るく進んでいく道をさがしていきたい。

決算状況報告(法人)

法人全体

科 目	金 額
収 入	261,192,238
支 出	246,760,373
収支差額	12,751,934
人件費比率	65%

法人全体の収支差額は約1,275万円であった。給付金事業が全て黒字決算であったのがポイントであろう。＜コロナ禍＞で四苦八苦したことを思えば、評価しうる数値だ。更にいえば、まだまだ＜伸びしろ＞がある。いわゆる＜入所系・通所系＞は定員割れしている。この課題に取り組み、打開すれば、収益増加が見込める。優先課題として取り組んでいきたい。

決算状況報告(給付金事業)

共同生活援助

久しぶりに500万を超える黒字決算であった。新築・移転の際、建築費補助金（国庫補助）に太田市独自の補助金（グループホームに限定されているが）出たことが大きかった。もう少し黒字を増やしていくことができそうな状況である。ただ、現場からケアの充実を図るため、職員の増員要請があり、今年度より1名の職員を増員したため、そう単純にはいかないだろう。

科 目	金 額
収 入	145,798,218
支 出	139,237,291
収支差額	6,560,927

就労継続支援B型(麦の家)

科 目	金 額
収 入	24,204,100
支 出	23,861,585
収支差額	2,930,308

昨年度、赤字決算から黒字に転じた。昨年度は合併(麦の会からアルカディアに合併)による<新規事業>扱いで加算がつかなかったことで赤字を余儀なくされたのが痛手であった。

ただ、今ひと踏ん張りが必要だ。月平均利用者数が12人台が昨年度から続いており、この課題を打開していくことが最優先である。

ふらっと相談支援事業所

本来、収益が期待できない事業において、収益を上げていることが評価に値する。地活I型（ふらっと）も絡んでの決算内容であるが、この収支はこれからも維持できる。課題は相談支援専門員資格者を増員していくことであろう。

科 目	金 額
収 入	3,666,100
支 出	1,025,718
収支差額	2,640,382

【総 評】

給付金事業では、全てにおいて黒字決算となった。まだまだ改善すべきことはあるが…。令和2年度は、周知のとおり、<コロナ禍>に明け暮れた年でもあった。入所事業、通所事業等においては、体験利用もできない状況であったにもかかわらず、この決算内容は納得しうる結果として評価しうる。

また、コロナ感染症者が一人でも出たら、危機的状況になってしまう中で、利用者、職員ともども<我慢>としかいいようがない時期を乗り越えてきてくれた。。

決算状況報告(委託事業)

地域活動支援 センターⅠ型 ふらっと

科目	金額
収入	22,506,119
支出	22,565,929
収支差額	- 59,810

援護寮はばたき

(自立訓練(生活
訓練)、宿泊型
自立訓練)

科目	金額
収入	70,772,840
支出	70,154,960
収支差額	617,880

地域活動支援 センターⅢ型 耕人舎

科目	金額
収入	16,461,664
支出	16,558,165
収支差額	- 126,501

アルカディア相談 支援事業所

(太田市相談支援
センター内)

科目	金額
収入	11,000,021
支出	11,520,337
収支差額	- 520,316

【総 評】

委託事業に収益は期待できない。現実には少額の赤字運営である。支出の大半が人件費で占められているゆえ、ギリギリの職員数で事業展開するしかない現状であるが、給与は年次増加していくため、行政に対して、委託費の増額を要望するのだが、行政からは「上げられない。現行委託費でパート職員の雇用等でやりくりしてもらえない」と返答が帰ってくる。＜正職員をリストラしてパート雇用？＞…。

障がい者福祉をとりまく全体状況と社会福祉法人の経営的課題

～各々の法人が守備範囲をなんとか守り抜くしか方策はないのだろうか？～No.1

■総合支援法

●総合支援法と落とし穴

H18年、＜障害者自立支援法＞が施行された（後に＜障害者総合支援法＞）。この法は現在に至るまで福祉法人の経営的諸問題を左右している。

施行当時、私たちは、「やっと精神障がい者福祉も他障がいと同じスタートラインに立つことができる」と思った。ところがとんでもない＜落とし穴＞があった。

●質から量への発想転換

入所事業所、通所事業所とも基本単位、加算をにらみながら何人利用者がいれば経営的にやっていけるのか？を探った。そこでは＜支援の質＞は後退し、利用者の人数確保が優先された。＜質から量への発想転換＞であった。しかも法人経営からすれば、やむを得ない手段であったといえよう。

●分断の始まり

法に定められた障がい者福祉の範疇に居る人たちと、対象外とされた人たちとの＜分断＞。

●基本単位を変えず、＜加算＞をいじる手法

基本単位はほぼ変化なしで経過している。他方、事業ごとに＜加算＞に手を加える。医療における＜診療報酬（改訂）＞と同様の手法だ。1990年代、精神科病棟の機能分化が＜診療報酬＞で誘導され、あっという間に地図が塗り替えられた。また、＜適時・適温＞加算が出てきて、ほとんどの病院が加算をとったら、突然、加算がなくなった例もある。要は数字を「こねくり回す」ことが得意な＜官僚＞の気まぐれに翻弄(ほんろう)されている。＜頭の中でしか福祉＞を考えない連中に振り回されるのは勘弁願いたい。…でも逆らえないのかなあ…

障がい者福祉をとりまく全体状況と社会福祉法人の経営的課題

～各々の法人が守備範囲をなんとか守り抜くしか方策はないのだろうか～ No.2

■組織と活動の「タコ壺(つぼ)化現象」

個人的見解だが、様々な組織が＜タコ壺化＞に陥っている。＜先が見えない、読めない＞、＜課題が見つからない、あったとしても打開策もない＞、このような状況におかれたとき、組織はタコ壺に入ったまま抜け出せなくなる。（タコはタコ壺に入ると中をグルグル回るだけで抜け出せないらしい）

＜国、行政の無策＞を百回、叫んでもむなし。＜原点回帰＞も苦肉の策と思えて仕様が

■社会福祉法人経営の在り方

●打開の壁は相当に厚いことを覚悟すること

ジリ貧あるいは現状維持しか望めない状況において、経営の安定化を成し遂げるには困難が待ち構えている。労働条件を改善することは全力を尽くしたい。将来的な設備投資も必要だ。

だが、原資がないところでは何もできない。内部留保を作り出していかなければならない。これが至難の業。

●法人の創意工夫

難しい課題だ。ただ、言えるのは＜やりたいことと、やらなければならないこと＞が出来るだけ乖離しないことだ。そして、その行為が職員の充足感とともに収益へとつなげていくこと。「何を言うのか、それができれば苦労しない！」と言われそうだが…。私たちは＜王道＞を進んでいくしかない。

●共有化しよう～他法人も含めて～

ここでいう共有化とは、＜ある物事＞について各人が違う発想、視点でいいから＜物事＞を理解する内容を一つでも共通認識することである。

言い換えれば、＜福祉法人の経営＞について、その従事者が自己の仕事と経営とを一つにすることを意味する。

では、その先どうすればいいのか？障害者福祉に国の予算を増加させる＜ロビング活動＞も必要。他法人も含めた「経営者会議」的集まりと議論も必要。やらねばならないことは山積しているが…。今はその担い手をしっかりと作り出す、これくらいしか言えない。

（記：北 一樹）

編集後記

今回、法人アルカディアの決算報告及び、その読み取りを載せた。既に＜決算＞については、ホームページでも見られるが、法人としての読み取りや現状、今後の課題・展望を公にするのは初めての試みだ。＜可視化・みえる化＞が社会的にも要請されている中で、その一環と思ってもらえれば幸いである。状況の推移はそう甘くない、厳しい状況にあると覚悟していた方がいい。そうした中で、法人の決算のみならず、＜弱さ・課題＞等を＜みえる化＞していくことが必要だと思われる。

ニュースレター編集委員

法人本部：群馬県太田市鶴生田町733-123

TEL：0276（20）2509 FAX：0276（20）2510

ホームページ：<http://arcadia-gr.com/>